

農用地景観に対する農村住民の意識と評価

磯 島 昭 代

(東北農業試験場)

Rural Residents' Consciousness and Evaluation on Landscape of Farmland

Akiyo ISOJIMA

(Tohoku National Agricultural Experiment Station)

1 は じ め に

現在、水田地帯では農用地の大区画化が進められているが、効率優先の圃場整備事業は単調で画一的な空間を作り出し地域特有の美しい景観を喪失するのではないかと懸念の声も聞かれる。農業・農村の多面的機能が注目される中、農用地の景観を経済的に評価する手法¹⁾や画像シミュレーションによる予測システムの開発²⁾などが試みられているが、実際に農村住民がどのような農用地景観を望ましいと感じているかについては未だ明らかにされていない。

本報告はいわて・むらづくり塾³⁾塾生36名を対象に行った景観意識調査をもとに、農村住民の農用地景観に対する意識と評価の分析を試みたものである。いわて・むらづくり塾は地域の活性化に取り組むリーダーの育成をめざしており、塾生達は活力ある地域の創造に意欲を燃やしている。彼らの農用地景観に対する意識を明らかにすることは、よりよい農用地景観の創出に役立つものと考えられる。

2 調 査 方 法

調査内容は以下の2段階に分かれている。

①意識調査：農用地やその周辺の景観に関する意識を問う質問16項目を用意した。それぞれの項目について、「3：非常にそう思う」「2：そう思う」「1：ややそう思う」「0：そうは思わない」のいずれかを選んでもらい、景観

に対する意識を調べた。

②評価調査：小区画圃場、大区画圃場、山間地圃場の典型的な写真を1枚ずつ提示し、各農用地ごとに景観を形容する言葉17項目について、「3：非常にそう思う」から「0：そうは思わない」まで、4段階で答えてもらった。

3 調査結果及び考察

(1) 農用地景観に対する意識

1) 全体的特徴

平均得点が上位を占めた項目は、「川魚のいる水路」「住民の合意形成」「景観を考慮した計画」であり、下位の項目は、「個人の好みの問題」「農用地は生産の場」「農用地景観に興味がない」となっている。全体として、農用地景観は地域の活性化に重要であり、住民の話し合いのもとに計画を立てて整備するべきだと考えられていることがわかる。また、景観と経済・利便性の関係を問う項目は得点に大きな開きがなく、農村住民の間でも明確に断定できずにいることが読みとれる。

2) 属性別意識の特徴

農用地景観に対する意識を問う項目を大きく分類すると、「景観を優先」「経済性優先」「景観に対する好み、政策等」の三つに分けられる。各属性ごとに平均値の差の検定を行うと、年齢では40歳未満が、職業では農業が、居住経験では都市生活経験のない人が、集落形態では集居の方が、景

表1 属性別農用地景観の意識の差

項目 分類	属性分類	年 齢	性 別	職 業	居 住 地	居住経験	集落形態
		40歳未満	男 性	農 業	市 街 地	経験あり	散 居
	意 識 項 目	40歳以上	女 性	非 農 業	農業集落	経験なし	集 居
景 観 優 先	経済損失やむなし 不便でも美しい方が良い	-0.60**			-0.81**		0.73*
経 済 性 優 先	利便・経済性損なわず 手間・お金は不要	0.92*** 0.48**					-0.66* -0.50***
	農用地景観に興味がない 農用地は生産の場 用水路はコンクリート	0.25*		0.21* 0.79***	-0.17*	-0.48* -0.36* -0.62*	-0.57**
好み・政策等	伝統的な農用地景観 景観を考慮した計画 まっすぐな水路・農道	-0.51**	-0.91**				0.93*

注. 1) 「*」…有意水準10%, 「**」…有意水準5%, 「***」…有意水準1%。

2) 数値は属性ごとの平均値の差。年齢「40歳未満-40歳以上」、性別「男性-女性」、職業「農業-非農業」、居住地「市街地-農業集落」、居住経験「都市経験あり-なし」、集落形態「散居-集居」。

マイナス記号は、上段より下段の方が平均点が高いことを示す。

観より経済性を優先する傾向にあることがわかる(表1)。

(2) 農用地景観に対する評価

小区画圃場の評価で上位を占めている項目は「のどかな」「広々とした」「人工的な」であるが、全体的に大きな得点の差は見られない。大区画圃場は「効率的な」「広々とした」「働きやすそうな」が上位を占めている。高得点が予想された「無機能的な」「よそよそしい」は1ポイント前後しか獲得しておらず、「大区画圃場は無機能的でよそよそしい」とは必ずしも捉えられていないことがわかる。山間地圃場は「のどかな」「自然と調和した」「なつかしい」が高い点を獲得しており、だいたい予想どおりの結果となっている。ただし、「厳しい」という項目は他の農用地に比べて高く、「働く場としての厳しさ」を感じとっているものと見られる。

(3) 農用地景観の意識と評価の関係

農用地景観に対する評価の違いが、対象とする人々の農用地景観に対する意識からどのように説明できるかを判別関数を用いて分析した。各農用地景観を「美しいと思うか」という問いに対し、「3:非常にそう思う」「2:そう思う」と答えた人を「Ⅰ 美しいと思う群」に、「1:ややそう思う」「0:そうは思わない」と答えた人を「Ⅱ 美しいと思わない群」に分類してこれを目的変数とした。説明変

数には景観に対する意識項目の回答結果を用いた。なお、意識項目は回答の選択肢を等間隔の距離尺度として把握して数値データ化したため、判別関数による分析を採用した。

まず、小区画圃場の判別を見ると、「伝統的な農用地景観」「住民の合意形成」の二つの変数が有意な影響を及ぼしている。このことから伝統的な農用地景観を好み、住民の合意形成を重要と考える人は、小区画圃場の景観を美しいと感じる傾向にあることがわかる。一方、大区画圃場では有意な影響を及ぼす変数のうち、「不便でも美しい方がよい」と考える人が、「美しいと思う群」に分類されることが注目される。これは、利便性より農用地景観を優先させる人々が大区画圃場を美しいと感じていることを示しており、「大区画圃場は効率優先で農用地景観を破壊する」とは必ずしも捉えられていないことを示している。山間地圃場の判別では、誤判別率が10.5%と9割近くが正しく判別されることを示している。説明変数の内容を見ると、「住民の合意形成が必要」「不便でも美しい方がよい」との考えを強く持っている人は山間地圃場を美しいと思う群に分類され、係数がマイナスを示す「農用地景観に興味がない」「まっすぐな水路・農道は美しい」という項目に賛意を示す人は美しいと思わない群に分類されることがわかる。(表2)。

表2 農用地景観意識による各農用地景観評価の判別結果(2群判別)

目的変数 Y	説明変数 X	係数 a	定数項	マハラノビス平方距離 (誤判別率)
小区画圃場を美しいと Ⅰ思う Ⅱ思わない	X1 伝統的な農用地景観	1.276*	-5.593	2.331 (22.3%)
	X2 住民の合意形成	1.456*		
大区画圃場を美しいと Ⅰ思う Ⅱ思わない	X1 不便でも美しい方がよい	0.819*	-2.123	1.185 (29.4%)
	X2 まっすぐな水路・農道	0.931*		
山間地圃場を美しいと Ⅰ思う Ⅱ思わない	X1 農用地景観に興味がない	-2.663*	-4.972	6.308 (10.5%)
	X2 住民の合意形成	3.007**		
	X3 不便でも美しい方がよい	1.278*		
	X4 まっすぐな水路・農道	-1.379*		

注. 1) 係数欄の「*」は検定結果を示す。「*」…5%、「**」…1%で有意。

4 ま と め

本報告では、農用地景観に対する意識が回答者の属性によって異なること、「大区画圃場の景観は無機能的でよそよそしい」とは必ずしも捉えられていないことを明らかにした。さらに、農村住民の農用地景観に対する意識がその評価とどのように関わってくるかということを明らかにした。今後はこれらをふまえ、さまざまな考えを持つ農村住民が、より望ましいと感じる農用地景観を創出していく方法を見いだすことが重要であると考え。

引 用 文 献

- 1) 藤本高志, 高木清隆, 横井邦彦. 1993. 景観形成作物の居住者による経済評価. 農村計画学会誌 12(1): 33-45.
- 2) 松尾芳雄. 1992. 景観シミュレーション手法. 農林地のもつ多面的機能の評価に関する研究資料 No6: 87-119.
- 3) 門間敏幸. 1990. 21世紀村づくり塾運動の意義と留意点. 東北農業経営・農村生活研究資料 No4: 75-88.